岩手県立大学での充実した６年半に感謝

堀内　聡

2014 年 10 月 1 日に岩手県立大学社会福祉学部に採用して頂いてから早いもので 6 年半が過ぎました。当時はアラサーであった私もアラフォーのオッサンになってしまいました（涙）。退職にあたって、お世話になった学生の皆さん、教職員の皆様にお礼を述べたいと思います。

学生の皆さん。私のつたない授業や研究指導に付き合って頂きまして、本当にありがとうございました。実は皆さんに授業をする時、自信がなかったんです。私は赴任前、学問の勉強はしてきました。しかし、学問の教育の仕方はまったく学んでいませんでした。これは本当の話です。例えば、中学校の先生は先生になる前に必ず中学校で実習をします。しかし、大学教員はそのような機会がありません。そのため、社会福祉学部の講師になった時、教育の素人である私がいきなり授業をすることになりました。試行錯誤する毎日でした。皆さんから頂いたフィードバックを便りに授業を見直しました。皆さんがくださる優しいフィードバックに心を救われたものです。皆さんが優秀で、忍耐強く、優しい方々で救われました。また、学生の皆さんからは心理学について様々なことを教えていただきました。この原稿を書いている 2021 年 1 月の時点で堀内班（福祉心理系ではゼミではなく班というらしいです）の学生が筆頭著者として世に送り出された論文が 5 編あります。このうち 1 編は会員数が 1500 名以上の学会誌（認知療法研究）、4 編は本学部の紀要です。他にも学会発表を多数行っています。多くの学生が卒業研究を学会で発表したり、論文を投稿するという研究者さながらの活動をしてくださいました。好奇心あふれる学生たちに恵まれ、たくさんの刺激をいただくとともに、大いに心理学を学ぶことができました。皆さんのおかげで、無事に 6 年半の教育活動を終えることが出来ました。本当にありがとう！

教職員の皆様。私は生意気でよくしゃべる存在だったと思います。そのような私に対して、皆様は時に励ましてくださり、時に優しく諭してくださり、時に笑ってくださり、時にスルーしてくださいました。私はシャイな人間です。赴任前は職場に馴染めるか不安だらけでした。皆様のおかげで何とか 6 年半の教員生活を無事に終えることができました。心より御礼申し上げます。

最後に今後の抱負を述べたいと思います。私がこの 6 年半頑張ってきたことはジャーナル編集です。今後もよいジャーナルづくりを目指して頑張りたいです。心理学は大きな変換点にあると私は思っています。心理学研究の再現性のなさが明らかになり、心理学研究の在り方や成果公表の場であるジャーナルが変革を余儀なくされているように感じます。例えば、従来と比較して、心理学は追試を軽視しなくなりました。私は「追試は二番煎じ」と教えられました。今はこの考えは必ずしも一般的ではありません。また、従来はきれいな結果を得るための実験手続きの工夫（例：教示をする際に声の調子を変える）はあえて公開されない傾向がありました。今では実験マニュアルが公開される傾向にあります。データを公表することも一般化しました。ジャーナルも変わってきています。原著論文、短報などの従来からある区分に加えて、研究プロトコル、事前登録研究、結果がない論文審査（result-free review）などの区分が出てきています。また、査読プロセスをオープンにするジャーナルも増えました。心理学が世に貢献するために、研究成果を伝える媒体であるジャーナルはどのようにあるべきなのでしょうか。新しい勤務地で学びながら、古き良きもの、新しい良きものも融合して、模索し続けたいと思います。

岩手県立大学でお世話になった全ての皆様。6 年半、本当にありがとうございました。研究などで岩手には来ますので、今後とも何卒よろしくお願い致します。